

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】 向井 洋子

【所属】 琉球大学

【研究題目】 占領期沖縄における琉米関係の研究－アメリカ人神父フェリックス・レイを中心に

【研究の目的】

本研究の目的は、2 つある。第 1 に、沖縄におけるアメリカ研究を発展させることにある。これまで我が国のアメリカ研究において、琉米関係への関心は強くなかった。しかし、グローバル化の進展は、自らを「非支配地域」とみなす傾向の強い沖縄においても、琉米関係研究を見直す動きを生み出した。これを受けて、本研究は、占領期沖縄において、カトリック教会カプチン・フランシスコ修道会ニューヨーク教区から沖縄に派遣された神父フェリックス・レイに焦点を当てる。彼の活動を通じ、必ずしも支配-被支配の関係だけではなくたことを明らかにし、沖縄で醸成されたアメリカ観の多様性に関する議論を補う。第 2 に、米軍基地をめぐる硬直化する沖縄問題に対し、相互理解と協調を促す視点を提供するものである。占領期において、「アメリカから来た占領者」ではないアメリカ人神父の活動は、沖縄の人々の意識のなかから支配-被支配の関係を乗り越えることができたからである。

【研究の内容・方法】

本研究は、占領期沖縄の公的資料やカトリック教会沖縄教区事務所が所蔵する資料を用い、レイ神父の活動とこれに対する沖縄の人々の反応を明らかにするものである。分析の方法は、一次資料と関係者へのインタビューを中心とした歴史分析の方法を用いる。

はじめに、我が国におけるアメリカ史研究と冷戦史研究をふまえ、沖縄ではアメリカのプロパガンダ政策が強化されてきたことを示す。これをふまえ、沖縄のアメリカ研究で、アメリカ軍基地の存在と日米地位協定下の米軍人に対する特権などを根拠に、アメリカの「占領者」としての側面を強調してきたことを示す。しかしその一方で、アメリカ軍との関わりをもちながら、プロパガンダ政策に協力することを拒否し続けてきた存在は注目されてこなかった。それが、沖縄のカトリック教会である。

このカトリック教会と沖縄の出会いは、1844 年まで遡ることができる。ただし、本格的な関わりをもちはじめたのは、1947 年以降である。第 2 次世界大戦後のアメリカの占領を見越し、ローマ教皇庁がアメリカ人神父たちに沖縄へ赴くよう依頼したからである。レイ神父は、このとき沖縄へ派遣された神父の 1 人だったのである。

このレイ神父が教区長となり、占領期の沖縄でカトリック教会の政治的中立性を明確に示した。具体的には、「戦争は個人の心にある野心や憎しみなどが原因で生じるものであるから、そうした人々の教師たりうるカトリック信者を育成していくこと」が重要であるという教区長としての表明である。これは、朝鮮戦争とアメリカ軍による土地の強制接収に対する住民の抵抗運動を背景に、反共主義的な意見を明らかにする神父や信者があらわれたことに対する反応であった。その後、レイ神父は、カトリックを布教する拠点となる修道女会を設立し、この修道女会とともに、戦争未亡人の経済的自立支援や幼児への脱脂粉乳普及活動を行った。こうした活動が住民に広く受け入れられ、カトリック教会は、学校や墓地建設のための土地買収を円滑に行うことができたのである。

【結論・考察】

冷戦史の文脈で考えると、占領期におけるアメリカと沖縄の関係は、支配者-被支配者という関係となるが、これは政府を中心とした場合である。軍という政府機関から距離をおき、政治的独立性を保ったカトリック教会のアメリカ人神父たちは、沖縄の人々から支配者とはみなされなかった。そのため、沖縄の人々は、軍に対しては土地売却せず激しい抵抗運動をしたのに対し、カトリック教会に対してはあっさり土地を売却した。この違いは、沖縄の人々がアメリカ人を一括りにして捉えていたのではないことを示している。つまり、支配者のアメリカ人もいれば、敵のアメリカ人もいるが、友人のアメリカ人もいたと認識していたのである。

したがって、レイ神父のようなアメリカ人と沖縄の人々の関係に焦点を当てれば、占領期沖縄の琉米関係は極めて良好であったといえる。この研究結果から、硬直化する沖縄問題に対する相互理解と協調を促す視点を提供するなら、政治問題とそれ以外の問題を完全に分離することが必要とことになる。